

年刊の『想夫恋(ポッカス翁十日物語)』なども人気を博していました。

一方、日本の文化をイタリアで紹介した書物としては、『日本占星術資料』(ジェノバ、1874年)や『日本神話』(ポローニヤ、1929年)など十数点も出展しました。

また、この展示会の最終日である29日(月)にはフォーラム「イタリアに魅せられた理由」を同展示会場内で開催しました。このフォーラムには本学の卒業生で映画評論家として活躍している<sup>とき</sup>梶<sup>あきひろ</sup>明浩氏が「イタリア映画発見の旅へ」を、またイタリア研究の専門家である本学の清瀬卓教授が「イタリアとの出会い」をテーマに講演を行いました。



この展示会とフォーラムは事前に新聞やテレビ、ラジオなどで紹介されたことから、一般の市民の方々も多くつめかけ、学生や教職員のみならず共にイタリアの雰囲気を楽しんでいました。

### テレビ番組で本学図書館の資料が使われる

本学図書館はNHKテレビからの要請に基づき、16世紀に来日してキリスト教の布教に携わった宣教師ルイス・フロイスの『日本史』を資料提供しました。NHKテレビはこの資料を使って、昨年11月7日(水)に「その時歴史は動いた 千利休切腹の悲劇」として放映しました。

なお、昨年一年間を通じて本学図書館がテレビ番組への資料提供協力を行った件数は、民放も含めて3件目となりました。

### 司書雑感

#### 「外国人が見た日本」と本学図書館

本学の図書館には、学生の皆さんに余り知られていない文献の使われ方があります。そして、その用途が極めて多くの人たちを対象にしたものであることから、皆さんの中で高校生までの時期に本学図書館の文献と出合っている人はかなり多いのではないのでしょうか。

少々回りくどい言い方になってしまいましたが、本学図書館は貴重書を教科書会社からの求めに応じて資料提供することがあります。たとえば、オランダ東インド会社の医者であったフランツ・フォン・シーボルトの大著『日本』に収録されている挿し絵で、江戸時代にキリスト教を取り締まる手段として用いられた「踏み絵」のシーンは、毎年複数の教科書会社から希望されます。ここまで申しますと「そう言えば、そんな絵が歴史の教科書に載っていた」と思い出される方も多いのではと推測します。

また、本学図書館の文献はテレビ番組の制作資料になることもあります。昨年はNHKの「その時歴史が動いた」や日本テレビ系の「知ってるつもり」など、皆さんがよくご存じの番組で16世紀に来日した宣教師ルイス・フロイスの資料が使われました。「細川ガラシャ」や「千利休」、「織田信長」についての新しい角度からの検証は記憶に新しいところではないのでしょうか。

これまでに本学図書館が提供した文献に共通している点は、いずれも文献を記した外国人が日本に滞在した時代の事柄や歴史を記述したものであり、当時の日本人によって同じ観点から書き残された資料が少ないことです。いいかえれば、西洋の人たちの感性で捉えた日本の記録であり、現代の日本人が歴史を振り返る上で掛け替えのない「史料」と位置づけられるものなのです。

これらの文献が含まれているニッポナリア(西洋言語による日本研究書)・コレクションには、日本人が自らの歴史を新しい角度から見つめなおすことが出来る稀覯書が多く含まれており、学外からも注目される本学図書館の大きな特徴となっているのです。

(奥 正敬)